

---

# 魔法世界と高校生

藤枝夏彦

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法世界と高校生

### 【Nコード】

N4099Z

### 【作者名】

藤枝夏彦

### 【あらすじ】

2030年

現代の魔法はかなり手軽なものになり誰でも使用出来るようになった。

初

最初に

「魔法」

魔法とは呪文を唱えたりして行うが、この世界では違う。魔法を使用するには魔法結晶石まほうけつしよせきが必要となる。

魔法結晶石とは魔力が込められた結晶石である。

人間は誰でも魔力を所持している。だが魔力を所持しているだけでは魔法は使用は出来ないのである。

魔法を使用するにはおのれ自身の魔力を魔法結晶石まほうけつしよせきで変換する必要があるのだ。

けれど魔法結晶石も無限で使える訳でも無い。例えるなら拳銃とかと同じで弾数が無くなると使用出来なくなるのである。

使用出来なくなった「魔法結晶石まほうけつしよせき」は専門のショップに持っていき補充する必要がある。

補充するにはショップへ行き己自身の魔力を魔法結晶石まほうけつしよせきに変換すれば再び使用する事が出来る。

魔法結晶石を使用した魔法にも種類があり主に火水風雷土光の6種類と補助魔法に分けられる。

基本攻撃系魔法は6種類の中の1種類しか使えないが補助魔法は別で誰でも気軽に使用する事が出来る。

今、この世界には4つの魔法高校が存在する。

ヨーロッパ、ロシア、アメリカ、日本の4校である。

このいずれかの高校を卒業すると国家公務員クラスの待遇を受ける事が出来るので毎年何万人もの受験生がいるのである。

これがこの世界における魔法である。

「4月15日」

日本魔法騎士学校これが今日から俺が通う魔法高校。 といつても1週間前が入学式なのであるが手続きの問題上入学式には出れず、今日が初登校になる。

なのだが完全に寝坊してしまい急いで学校に向かっている途中である。

「やばい！やばい！完全に遅刻コースだ！」

「俺ちゃんと目覚ましかけたはずなのに・・・」

髪の色は漆黒の黒、髪の長さはやや長めで目にかかる位、制服を少し着崩して着ている

「志木野春樹」

は通学路を走りながら自分の制服のポケットに入っていた携帯を確認すると

「電源入ってねえじゃねーかよ！」

と一人で叫び

「参ったな、入学式に出れなかったし、今日が初登校になるのに初日から遅刻かよ」

つと春樹は最初こそは急いで走っていたが走るにつれ確実にペースが落ちていた。

「はあ、はあ、はあー」

春樹は息を切らしながら

「あーだめだキツイ諦めるか。」

つと完全に走ることを諦め歩き出し

(体力落ちたな〜運動不足かな。ここの学校受かる為に勉強ばっかしてたしな。)

とか

(この学校どんだけ広いんだよ)

っと思いなから春樹は学校への道を歩いていた。

ちなみにこの学校の広さは半径10キロにも及ぶ広大な学校である。

この敷地内に学生寮

があるのだが校舎は中央にあり学生寮は東の端にある。一応自転

車通学も可能であるが

春樹は持つていないので徒歩になる。

(8時15分かゝ えーと確かHRは8時半だったよな。まだここからだと20分位掛かるな)

と思いなから通学路を歩いていると、自分と同じように歩いている女生徒がいた。

(俺と一緒に遅刻組みかな)

っとか心の中で思いなから歩いていると前を歩いていた女生徒がいきなり立ち止まりすぐ傍にあった桜を眺めだした。

「……………綺麗」

っとその生徒は小さく呟いた。後ろを歩いていた春樹は

「綺麗ってもう桜の花も大分散ってるぜ」

っと思樹はその女生徒に話しかけていた。

「えっ?」

と言い少し驚いた女生徒はこちらを振り返った。その女生徒は長い黒髪に二重瞼で凄く

綺麗で大和撫子と言言葉が凄く似合う少女であった。

「あ、いやゴメン」

っと思樹は

(あれ?なんで俺今話しかけたんだろ。)

「うんうんいいの確かに桜もかなり散っちゃてるし……………」

「でも私っつて桜観たのっつて初めてなの。」

っと思樹は少し寂しそうな顔で答えた。

「いいの?このままじゃと授業に間に合わないよ」

つと女生徒が春樹に話しかけてきた。

「おつとそうだそうだ」

さすがにこれ以上遅刻はヤバイと思った春樹は

「じゃあ俺先行くわ。」

「君はいいの？」

春樹はそう女生徒に「尋ねると

「うん。私はもうちょっと桜を観てから行くから。」

「わかった。じゃ先に行くわ。」

といい別れ際に

「あ、俺志木野春樹ていうんだ学校で会ったらよろしくな。」

つと女生徒に言うつと

「うん。よろしく私は冬野雪<sup>ふゆのゆき</sup>」

つと彼女が答えてくれたので春樹は手を振って別れた。

8時45分

春樹はどうにか学校にたどり着き下駄箱で上靴に履き替えて春樹は廊下を歩いていった。まだ廊下

には生徒が何人かいておそらくHRが終わったばかりなのであろう。その中で春樹は

（え〜つと職員室だよなつてえ職員室て何処だよ。くそお学校の中も広すぎだ。）

つと思ひ広い校内を歩いていると

「おおいい！！」

と後ろから怒号をいわれ振り返ると

「おい！お前1年だろ！なんでこっちの校舎歩いていやがる！」

と金髪ピアスの男がこちらに歩み寄ってきた。近くにいた女生徒達は口々に

「やばいよ。あの子」  
や

「1年生だからここのルール知らないのかな？」

「私、先生呼んでくる。」

などと、周りにいた女生徒達はちよとしたパニックになっていた。

春樹は

(初日から最悪だ)まさか絡まれるとは・・・俺的には目立ちた  
くないんだが・・・)

つとか考えているとその金髪ピアスの男子生徒が春樹の前まで来て

「おい！聞いてんのか！」

つと怒号を飛ばしてくる。春樹はこれ以上絡まれても面倒なので

「はい、聞いています」

つと答え

「すいません。今日から初登校なんで職員室を探していたら間違え  
てこっちの校舎に入っ

てしまったんです。」

春樹が素直に謝ると金髪の男子生徒は

「ちっ」

と舌打ちをして

「職員室は向こうの校舎だ。さっさと行け」

と金髪男子生徒に言われた春樹は「ペッコ」

と1度頭を下げその場を後にした。

初（後書き）

初小説になります。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4099z/>

---

魔法世界と高校生

2011年12月14日00時48分発行